はじめに

この報告書は発達支援に関わる支援者を対象に行なったオンライン事例検討会の取り組みをまとめたものです。

発達支援にあたっては、子どもが日常を過ごしている身近な地域で支援を受けられることが重要です。地域の中で支援者が連携し同じ方向を向いていることは、支援をより着実なものにし、それが子どもと家族の安心の基盤になると考えられます。

離島では、専門的資源や研修の機会などが限られるという弱みがあります。他方、離島の子育てには豊かな自然の中での外遊びの充実や元気なお年寄りの存在、つながりの強い地域共同体による子育てなど独自の強みもあります。この報告書でまとめたオンライン事例検討会は、離島の各地区の事業所をオンラインでつなぎ、支援者のネットワークを形成することを目的としたものです。定期的で継続的な研修の場を提供すると同時に、支援者が本音で相談できるつながりの場を作ること目指しています。それにより、それぞれの支援者が持つ専門性を共有し、互いに高めあうことで、離島の弱みを強みに変え、島全体の支援の専門性を高めていこうという試みです。

毎回の検討会は和やかで温かく、参加すると「明日も頑張ろう」と自然に活力が湧く思いがしました。子どもの発達は不思議なプロセスで、彼らの学びは試行錯誤の取り組みそのものです。同時に、発達支援の取り組みもまた、答えがない試行錯誤の連続です。支援者は時に、自分が行なっている支援が適切なのかどうか、迷い不安になることもあると思います。支援者同士が率直に不安を語り合い、相談し合える連携の場が身近にあることが、発達支援を行う中での支援者の試行錯誤を支える場になるのではないかと思います。

2020年から始めた事例検討の取り組みを振り返ると、多くのお子さんについて皆さんと話し合い、思いを寄せ合ってきました。今回、この報告書には１２の事例検討の報告を掲載しています。一人一人のお子さんについて、参加者と一緒に、明日からどう関わったら良いか、どんな関わりがあり得るのか、子どもはどんな心情なのか、なるべくお子さんの視点に立つように心がけながら話し合った内容です。

今回の取り組みは、奄美地区障がい者等基幹相談支援センター（ぴあリンク奄美）さんとの偶然の出会いを得て、すでに始めておられた研修会を発展させる形で継続してきたものです。ぴあリンク奄美さんが現場のニーズや思いを汲みとりながら土台を支えてくださり、参加者が日々の実践を振り返り、互いに学び合った取り組みです。島の懐の深さに支えられ、私たちもつながりに入れていただき、多くの素敵な出会いをし、学びを得ました。この出会いに感謝し、取り組みを支えてくださっている皆様のご尽力に心より感謝申し上げます。この報告書が、読まれた方々の次の試行錯誤や取り組みの一助になればと願っています。

2023年 9月1日

鹿児島大学 大学院 臨床心理学研究科
准教授　髙橋 佳代

本冊子の構成と説明

そだちサポートプロジェクトとは？

「そだちサポートプロジェクト」とは、2019年度に立ち上げた、地域と研究者が連携して行う「子育て応援活動」「発達支援活動」を目的とした、鹿児島大学心理系教員グループと、奄美地区障がい者等基幹相談支援センターによる共同プロジェクトです。

地域の支援者や支援機関と心理系研究者が連携しながら、地域課題を分析し、それを元に必要な活動、支援を検討していきます。

そだちサポート勉強会とは？

そだちサポート勉強会は、「支援機関のネットワーク強化」「支援者技能の向上」を目的に、2020年度から行ってる、オンラインの事例検討会です。

「インシデント・プロセス法」という手法を用いて、奄美大島の療育関係事業所や学校教員、大学等をつなぎ、定期的な学びと交流の機会を提供しています。

目 次

○はじめに ---------- 1
○本冊子の構成と説明 ---------- 2
○インシデント・プロセス法を用いた勉強会とは？ --- 3
○事例検討の流れと進め方 ---------- 4
○取組事例まとめ ---------- 5～17
・CASE-01
・CASE-02
・CASE-03
・CASE-04
・CASE-05
・CASE-06
・CASE-07
・CASE-08
・CASE-09
・CASE-10
・CASE-11
・CASE-12
○おわりに ---------- 18
○共同編集略歴/事例について ---------- 19
○参考資料 ---------- 20～24
・第1期 実施状況まとめ
・第1期 参加者アンケートまとめ
○編集後記 ----------25

ヒトコトコラム

各事例の最後に鹿児島大学心理系教員による、事例の考え方に関するヒントやアドバイスがあります。

インシデント・プロセス法を用いた事例検討会とは？

インシデント・プロセス法とは？

提供された事例に関連して、参加者が事例提供者に質問し、その事例の周辺で実際に起こっている小さな出来事や背景など、困り感の原因に繋がっていると考えられる「情報」を収集し、それらをもとに必要と思われる支援を**参加者全員がそれぞれの視点で考えていく事例検討の方法**。

インシデント・プロセス法を用いることで期待できる効果

① **「ルールを共有」**することで、事例検討会に**「安心して参加できる雰囲気」**をつくる。

② 参加者の質問により必要な情報を集めることで、支援者間の **「理解の差を埋め」**、資料を準備する**「負担を減らす」**

③ 一問一答形式で質疑応答や支援方法の提案を行うことで、**「話したい事をまとめる」「みんなの前で発言する」**練習になる。

④ 役割（進行・記録・事例提供・参加者）を事前に決めることで、それぞれが自身の役割を理解し、主体的に参加することができる。

⑤ 参加者から出された支援に関する様々な意見やアイデアを**「共有」**し、事例提供者自身が行いたい支援を**「選択」**することで、すぐに自身の**「実践に生かす」**ことができる。

みんなが前向きに話し合うためにできること

①話し合いのルールを決める（安心できるルールがあることで、参加者が発言しやすくなるため）

・参加者は、これまでの支援や基本情報を集めるための質疑、提案された支援など、すべての発言を批判しない。

・事例提供者は把握していないことについて、「わからない、知らない」と答えてもよい。

⇒「知らない」という事も大事な気づき（新たな視点や、支援者同士の理解の「ズレ」も気づくきっかけになる）

②事例に関する資料の準備を簡素化する。（事例提供者の負担を軽減するため）

・必要な情報を参加者の質問を通して集めていくことで、それぞれがケースを理解していく時間にもなる。

・行うのはあくまでも「事例検討」。（「事例発表」ではないので、詳細な準備を行う必要はない）

・事例提供者は、質問についてその場で手持ちの資料を確認したり、同事業所の他のメンバーに聞きながら説明していくことで、解決に必要な要素を改めて確認することができる。

・他の参加者もサポートする意識が芽生え、「みんなで考える」という雰囲気つくりにも繋がる。

事例検討の流れと進め方

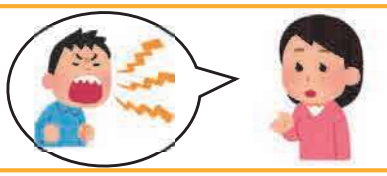
1.ルールを確認する（1分）

ルール①：他の参加者の発言をすべて受け止める。
ルール②：質問は、一問一答形式で行う。
ルール③：答えが分からない時は「わかりません」と答える。
ルール④：提案する支援方法は、「具体的に」「すぐにでも取り組めそうなこと」を。
ルール⑤：提案された意見の中から取り組みたい支援方法は、事例提供者が選ぶ。

2.役割を確認する（1分）

3.事例提供者が事例について説明する（2分）

・事例提供者は基本情報を説明し、最後に**「今一番解決したい（困っている）と思っているできごと」**について、参加者に伝える。



4.事例についての情報を集める（10分）

・事例提供者が伝えた「解決したいできごと」に関連すると思われる情報を、参加者との質疑応答で、明らかにしていく。

ルール① ② ③

5.それぞれで支援方法を考える（5分）

・「もし自分ならどんな支援を行うか」という視点で考える。
・「いつ」「だれが」「どこで」「どんな」支援をするという風に具体的に提案する。

ルール④

6.それぞれが考えた支援方法を発表して整理する（20分）

・考えた支援方法を、具体的に分かりやすい表現で簡潔に伝える。
・考えた理由を話したい時には、最後に伝える。
・支援方法をいくつかのグループにまとめて整理する。

7.事例提供者が「取り組みたい」と考えた支援方法を発表する（2分）

・出された意見の中から、**「一番いい支援方法」**を決めるのではなく、事例提供者が**「すぐにでも取り組みたいと思った支援方法」**を選ぶ。

ルール⑤